

巻頭言

「日本のビッグサイエンスはどこへ向かうのか」

「それにつけても金のほしさよ」 そんな言葉がつつい出てしまう、この頃である。

筆者が勤める国立天文台は日本の天文学の中核機関(現在では大学共同利用機関)として、研究者コミュニティの要望を受け、大学では実現不可能な規模の望遠鏡を次々に実現してきた。1960年岡山天体物理観測所にはじまり、(現在は東京大学所属の)木曾観測所、野辺山宇宙電波観測所、宇宙研とともに実現させた太陽観測用科学衛星やVLBIを用いた電波望遠鏡の数々、そしてハワイのすばる望遠鏡。21世紀には欧米諸国とともにチリにアルマ望遠鏡を完成させ、共同利用に供している。建設費も相当だが運用経費も問題だ。すばる望遠鏡は建設に約400億、年間運用費は当時の考え方では一割程度とされ、30億程度はあった。しかし、連綿と減額が続き、現在は年間10億程度しか配分されず、維持のためには毎年数億円を内部努力せねばならない。さらに研究者コミュニティからは次期計画への強い要望がある。口径30m望遠鏡、TMT計画に参加することとなり、建設費用は全体で一千億を超える。当初はその四分の一程度を日本が負担する予定だったが、反対運動のために見通しが立たなくなりつつある。しかし負担金は毎年支払わねばならず、その額も半端ではない。

同じく宇宙科学や惑星科学もビッグサイエンスの側面は強い。面白いことをやるためには、小型の探査とはいえ、それなりの投資が必要である。説明責任とともに、ステークホルダーへの働きかけも重要で、国立天文台では首脳部が100弱の議員事務所を訪問し、挨拶をするのが正月の恒例行事である。科学技術立国を国是としてきた我が国ゆえ基礎科学を含めた投資には前向きにと主張するも、実際には大学等の高等教育を含めて予算は縮減する一方だ。少子化や人口減少という右肩下がりが国家において、国際協力を見据えながら、面白いビッグサイエンスをどのように実現させていくのか、研究者にも問われている。

渡部 潤一(自然科学研究機構 国立天文台)